

統合荷重の更新

－ 思索を促し記憶に残る現代型ホテル －

22019024 富岡 みいる
指導教員 宮 晶子 教授

記憶	思考	統合荷重
対象化	日常	重なり

1. 研究の目的

今日私たちを取り囲む多くの空間は、思索を促さない。本来、“場所”とは思い出せるものであり、思考させるものであり、人生の一部となり得るものである。単なる機能的なものではない。

建築や要素が、人々を思考させ、“統合荷重”を更新していく空間を構築することを制作目的とする。

2. 記憶について

2-1. 統合荷重

私たちは連想記憶という記憶手段を持っている。連想記憶とは、様々な情報から重要なものを抽出、統合し、パターンとして記憶することで、獲得した情報を他の状況に利用する記憶方法である。記憶パターンの現れる頻度により、パターンの重要性が決まる。そして未知のモノに遭遇した時、私たちはパターンが既知のパターンと類似のものか判断する。もし未知のモノであれば関連に基づき分節化を行なった上で、記憶パターンを更新する。ニューラルネットワークでは、このように情報を統合し形成されたパターンの重要性を“統合荷重”といい、未知の情報を獲得することでそれらを更新することを“統合荷重の更新”という。(1)

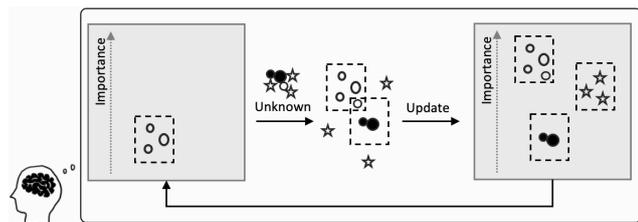


図 1 統合荷重の更新

2-2. 統合荷重を更新する時

引っ越しをする、直前の自分の部屋(図 3)は、毎日過ごしていた空間から荷物が跡形もなく消え、今までとは少し違う表情を感じた。知っているけれど知らない、日常から宙吊りにされているような感覚である。思い出しても、それは物体か景色か、あるいは感情なのか、記憶が定まらない。この

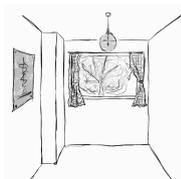


図 2 自分の部屋

時、自分の部屋に対して“統合荷重”が更新されていると考える。

2-3. 統合荷重を更新することの重要性

林檎を見た時、私たちは何を思い、考えるだろう。色や質感、味だろうか。あるいはいつの日か食べた林檎と、その日一緒に食べた人、情景、場所、感情であるかもしれない。では昨日あなたが通り過ぎた建物はどうか。単なる直方体のハコ、機能的な物体だろうか。私たちは目の前の場所がもつ固有の意味を排除し、既知の記憶パターンの中に分類してしまっただろうか。いつしか私たちは、場所や建築がもつあらゆる意味を、思考することなく分類し、ひいては排除してしまうことに慣れてしまった。本来私たちはモノと人、場所、考えや感情を相互に混ぜてモノを記憶していくものだ。しかし、現代の多くの建築物は、思考、記憶するにはあまりにも希薄なものが多い。統合荷重が更新されず、我々の思考を制御しているのである。

3. 統合荷重を更新する空間の分析

3-1. 対象化される頻度

かたちをもって成立する視覚的な事象に加え、認識や意思、欲求などの意識や行為が向けられることで人はモノを対象化する(図 3)。この対象化するモノが空間内に存在していると、視線や思考が行き来する。それらの頻度が多いと、空間の全体像をすぐに捉えることができず、既知の記憶のパターンに分類しにくくなる。



図 3 対象化するモノが多い空間

3-2. 日常からのズレ

ここで言う、“日常”とは、私たちが知っているモノのことを指す。日常からかけ離れている、すなわち日常からのズレが大きい空間(図 4)は、単に奇異なものに見なされ、私たちが自分自身の中に記憶や経験としてそれらを導入しようとしな。一方で、日常からのズレが小さい空間(図 5)は、周囲の環境の中に同化してしまい、既知の記憶パターンに分類されてしまう。よって、日常から大

きすぎず小さすぎないズレが生じている時、統合荷重は更新されると考えられる。



図 4 ズレが大きい(※1)



図 5 ズレが小さい

3-3. 重なり

対象化される頻度が高く、日常からのズレがある空間でも、それらを見直す、もしくは振り返ることができないと空間と自分が分離したままになり、統合荷重は更新されない。私たちは空間の中にあらゆるものを重ね、統合荷重を更新する。単に機能的な空間では、新しい思考やその重なりは生まれにくい。自分の経験や感情、思考が多く重なりあう可能性のある空間は、その時その人の重ね方によって、複製可能でない固有な空間、記憶となる。“重なり”を多く生む空間ほど、私たちに統合荷重の更新の機会を与えてくれる。

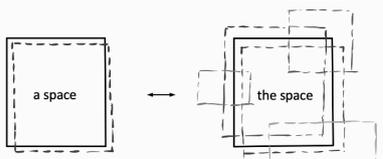


図 5 空間の重なり

4. 設計提案

4-1. 設計主旨

現代における多くのホテルは、空間のプログラムに対して機能が一対一で対応しており、一度訪問するだけで空間を簡単に把握することが可能である。そのため統合荷重が更新されず、私たちの思考が制御される恐れがあると考えられる。そこで、プログラムと機能の関係性を再考し、一つの空間がホテル内での行為を多様に受け入れていく様子を構築する。そうすることで、建築の要素が人々を思考させ、統合荷重を更新していくことを目指す。

4-2. 敷地

敷地は東京都中央区銀座2丁目の街区内とする。周囲には、東西南北に合わせて雑居ビルが整然と立ち並び、複数のビジネスホテルが存在する。機能が積層された建築群が多く見られる場所である。

4-3. 構成要素

3. で述べた、統合荷重が更新される時の空間条件を以下の建築の要素に変換し、ホテルの構成要素とする。

①彷徨う道

自分の足で選択し、踏み固めていく道の中で出会ったモノは、対象化されやすく、私たちの中で重要なものとなる。



図 6 道

②縁どる開口

上手に切り取った開口から見た眺めから、日常とは異なるもうひとつの秩序を対象化する。

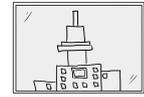


図 7 開口

③崩壊したスケール

日常のスケールと非日常のスケールを混在させ、空間と人間のスケールに関係を与えながらもズレを生じさせる。

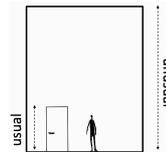


図 8 スケール

④侵入する境界

領域の境界にある間仕切りを可動式にすることで、日常の領域からズレた領域へと侵入する。

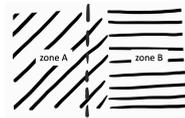


図 10 領域

⑤秩序ある躯体

自分の位置や目標を知り、経験を意識する。それにより、空間に経験や感情、思想の“重なり”を生み、建物や空間との結びつきを助ける。

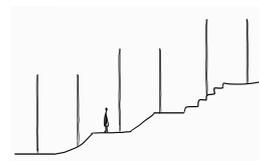


図 9 秩序

4-4. 手法

4-3. で述べた構成要素を動線計画から組み立てる。ホテルでは主に、客室部門、公共部門、設備・事務部門の三つの部門があり、従来のホテルではそれぞれの動線計画を分離させることで、一つの空間プログラムに対して一つの機能のみを対応させていた。そこで、それぞれの部門の動線計画を混合させ、一つの空間内に様々な機能を連結する。そうすることで、独特な空間が誕生し多様な行為が展開され、私たちに思考させ、統合荷重を更新する。そしてその場所が、やがて思い出す記憶となり、再び訪れた時にもまた統合荷重を更新し、私たちの人生の重要な一部となっていくことを期待する。

画像引用

(※1) Giant Typewriter Eraser <https://www.roadsideamerica.com/story/27413> (2024/1/1)

主要参考文献

- (1) 東京大学 『パターンの相関と連想記憶に基づく 運動パターンの分節化・記憶・抽象化』 第24回日本ロボット学会学術講演会 (2006年9月14日～16日)
- (2) D・リンドン C・W ムーア著 有岡孝訳 『記憶に残る場所』 鹿島出版会